

国際政治学

講義3

戦争と覇権の長期サイクル

早稲田大学
政治経済学術院
栗崎周平

戦争の長期サイクル論

長期サイクル論

- 戦争の発生が周期的(50-100年周期)
- 戦争がサイクルの入れ替わり期に発生する傾向
- 長期サイクル論の二つの見方
 1. 覇権国の興亡と戦争発生の同期性
 2. 世界経済の長期サイクルと戦争発生の同期性

長期サイクルの一般的な局面パターン

1. 国家の勃興(覇権国へと成長)
2. 影響力の相対的低下
3. 国力低下と他国の興隆(覇権を巡る争い)

戦争の長期サイクル

- 戦争と平和の100年サイクル
 - トインビー (Toynbee, 1954)
 - 50年毎に一般戦争 (General war)
 - 50年間の相対的に平和な期間 (全体で100余年)
 - 一般戦争 = 勢力バランスの調整機能
 - 1494年以来、5回繰り返される

トインビーの一般戦争

Year	Hegemonic War	Number of Great Powers Involved	Battle-Death
1585-1609	英西戦争 (スペイン無敵艦隊の敗北)	3/5	190,000
1618-1648	30年戦争	6/7	2,000,000
1672-1678	オランダ侵略戦争	6/7	300,000
1688-1697	大同盟戦争	5/7	700,000
1701-1713	スペイン継承戦争	5/6	1,300,000
1739-1748	オーストリア継承戦争	6/6	400,000
1755-1763	7年戦争	6/6	1,000,000
1792-1815	フランス革命とナポレオン戦争	6/6	2,500,000
1914-1918	World War I	8/8	7,700,000
1939 - 1945	World War II	7/7	13,000,000

Source: Jack Levy. 1985. "Theories of General War." World Politics Vol. 37, No. 3 (April)

覇権国の興亡と戦争の長期サイクル

- ギルピン(Gilpin)の覇権安定論
 - 原動力： 拡張主義(覇権主義)
 - 覇権国によるシステム秩序と安定性の提供
 - 世界統治の高コスト性

ギルピンの覇権戦争

Year	Hegemonic War	Challenger	Resulting Hegemon
1618 - 1648	30年戦争	Habsburg	
1667-1713	オランダ侵略戦争・ スペイン継承戦争	フランス	
1792 – 1814	フランス革命と ナポレオン戦争	フランス	イギリス
1914 - 1918	World War I	ドイツ	
1939 - 1945	World War II	ドイツ	米国

出典: Robert Gilpin. 1981. *War and Changes in International Politics*: Princeton University Press.

「世界システム」論と戦争の長期サイクル

ウォラステイン(Wallerstein)の世界システム論

- 100年サイクルの世界システム
- 世界システム: 中央 core と周辺 periphery
- 覇権の興亡はコンドラチェフの波に連動
- 世界経済の拡張と縮小に連動
- 原動力: 資本主義、世界経済
(モデルスキーは、政治の動きは経済から独立)

指導国の興亡と戦争の長期サイクル

- 指導国変遷の100年サイクル
 - モデルスキー(Modelska)
 - 50年毎にグローバル戦争(Global war)
 - 50年間の相対的に平和な期間(全体で100余年)
 - コンドラチェフの長期経済循環に連動
 - Global Warは景気回復期(2回に1回)に発生
 - Global Warは新しい世界指導国を決定

モデルスキーのGlobal Wars

Year	Global War	World Power	Challenger
1494	イタリア戦争	ポルトガル	スペイン
1580	オランダ独立戦争	オランダ	フランス
1688	大同盟戦争	イギリス	フランス
1792	フランス革命と ナポレオン戦争	イギリス	ドイツ
1914	第一次・第二次 世界大戦	米国	ソ連
2030	?	?	?

出典: George Modelski. 1987. *Long Cycles in World Politics*, University of Washington Press.

モデルスキーの長期サイクル論

長期サイクルの全体像

- 1サイクル: 1世紀、4局面

 - 局面1: 問題提起・課題設定

 - 指導国の正統性に陰り、地球規模の政治課題の登場

 - 局面2: 連合形成

 - 局面3: マクロ決定

 - 局面4: 実行

- **原動力**: グローバル戦争の政治的帰結が次期サイクルにおける国際政治の在り方を規定

- 長期サイクルは国際システムの指導国を巡り生起

モデルスキーの長期サイクル論

長期サイクルの全体像

- 1サイクル: 1世紀、4局面

 - 局面1: 問題提起・課題設定

 - 局面2: 連合形成

 - 解決策・発明

 - 局面3: マクロ決定

 - 局面4: 実行

- **原動力**: グローバル戦争の政治的帰結が次期サイクルにおける国際政治の在り方を規定

- 長期サイクルは国際システムの指導国を巡り生起

モデルスキーの長期サイクル論

長期サイクルの全体像

- 1サイクル: 1世紀、4局面

- 局面1: 問題提起・課題設定

- 局面2: 連合形成

- 局面3: マクロ決定

- グローバル戦争: 武力により次期の指導国を選択

- 局面4: 実行

- **原動力**: グローバル戦争の政治的帰結が次期サイクルにおける国際政治の在り方を規定

- 長期サイクルは国際システムの指導国を巡り生起

モデルスキーの長期サイクル論

長期サイクルの全体像

- 1サイクル: 1世紀、4局面

- 局面1: 問題提起・課題設定

- 局面2: 連合形成

- 局面3: マクロ決定

- 局面4: 実行

- 次期サイクルの国際秩序を策定・提供、そして疲弊

- **原動力**: グローバル戦争の政治的帰結が次期サイクルにおける国際政治の在り方を規定

- 長期サイクルは国際システムの指導国を巡り生起

モデルスキーの長期サイクル

課題設定・問題提起	解決策・発明	グローバル指導国 への契機	指導国
地理的発見・交易 (1430)	艦隊、基地、世界中への リーチ、交易の独占	トルデシリャス条約	ポルトガル (v. スペイン)
スペインの台頭と 宗教革命 (1540)	海洋(と交易)の自由	カルバン派の連合 オランダの貿易拡大	オランダ (v. フランス)
仏の挑戦と政治混 乱 (1640)	政治の安定 勢力均衡	英蘭同盟 ユトレヒト条約	イギリス (v. フランス)
仏の台頭と経済成 長・拡大 (1740)	産業革命 自由貿易	ウィーン会議(1815)	イギリス (v. ドイツ)
米独の台頭・ 科学/知識(1870)	情報革命 民主主義	14か条の平和原則 大西洋憲章	米国 (v. ソ連)
Integration (1973)	民主主義	ヤルタ会談	?

モデルスキーのGlobal Wars

Year	Global War	World Power	Challenger
1494	イタリア戦争	ポルトガル	スペイン
1580	オランダ独立戦争	オランダ	フランス
1688	大同盟戦争	イギリス	フランス
1792	フランス革命と ナポレオン戦争	イギリス	ドイツ
1914	第一次・第二次 世界大戦	米国	ソ連
2030	?	?	?

出典: George Modelski. 1987. *Long Cycles in World Politics*, University of Washington Press.

長期サイクルにおけるグローバル戦争

Q: グローバル戦争と長期サイクルの関係

- グローバル戦争は近代システムにおいて自律的に一定間隔で発生
- グローバル戦争後、1世代(30年)で指導国の相対的力の低下が明らかになる
- 古株の大国は大胆に、新興大国も浮上
- 世界規模の課題・問題の管理が困難になる

モデルスキーによる長期サイクルの特徴

グローバル・リーダーの条件

1. 島嶼国家・半島国家：安全保障のモート
2. 強大な海軍力
3. 経済超大国
4. 安定し、開かれた

敗退国

- スペイン： カスティーリャ王国との内戦
- フランス： 宗教紛争と革命・島嶼国家に非ず・大陸国家
- ドイツ： ワイマール共和国の失敗・大陸国家
- ソ連： ロシア革命(1917)・大陸国家
- いずれも経済大国だが革新力に欠ける

政治の波動と、大戦争の発生サイクルとの合致

	Modelski	Toynbee	Gilpin	Wallerstein
戦争	地球戦争	一般戦争	覇権戦争	世界戦争
局面数	4	5	N/A	4
原動力	指導地位 (海軍力)	勢力均衡	覇権主義	経済成長(農業・商業・金融)
戦争の意味	指導国決定	勢力バランスの調整	覇権の生成 <i>sometimes</i>	覇権の誕生・新たな経済システムの再編
衰退の原因	正統性の浸食	勢力バランスの変化	統治コスト	世界経済と成長率格差
予測	A future systemic war is not inevitable			

Take-home points

歴史の語り方は理論(モデル)フリーではない

- 文科省(山川の教科書)的な説明もその一つ
 - 歴史循環論
 - 「歴史の終わり」
 - 1.「神の国」を実現するとする、(アウグスティヌス以降の)キリスト教史観
 - 2.自己実現(質料が形相として実装)アリストテレス以降の弁証法
 - 3.自由獲得のヘーゲル史観
 - 4.共産主義実現の唯物史観
 - 5.民主主義実現のフランク・フクヤマの「歴史の終わり」
- ポジションを取って、相対化すべし

世界システム＋覇権循環論

- 戦略的環境における課題の発見(創出)
- 国際政治は、戦争の影に常にある